

## 遺稿 今昔談義 初代理事長 指宿孝博

昭和 20 年代には全国いずれの地にもみられたのと同じく、長閑な田園風景がここ河内長野の地にも色濃く残っていた・・・。

軍籍にあって焦土の地を数多く見てきた眼には、この故郷の天地の存在はまさに「國破れて山河在り」の感慨ひとしおの原風景として映じた。眼を街中に移せば、家並みは戦前とさして変わりはないものの、その屋根の下に営まれる生活には、凄惨な許りの戦禍の傷痕を生々しく残していた。

当時、患家に往診するようになって、一家の大黒柱を戦場に失い、栄養失調の幼子を抱え、自らも病んで途方にくれる母親、娘は行方不明、息子達の戦地からの帰還を只管に待ちわびる結核に病む寡婦、妻に先立たれ子息は戦死、天涯孤独の病弱な老父など、その多くは痩せ衰え、脂垢にまみれ、せんべい布団にくるまり、あるいは床上に膝を抱え、蚤や虱や南京虫に、夏は蚊にさえ苛なまれ、冬は肌刺す隙間風に身を屈め、ジーンと苦難を忍ぶより他に術のないこの世の地獄を見た。

愚かな戦争が残した生き地獄。それを一見昔変わらぬ故郷の家並の屋根の下に見た。時には僅かにしか採れなかつたであろう自家産の作物を病床に届けられる生き仏の姿も目の当たりにした。

その頃は栄養失調に加え結核が最も多く、現在では診ることも不可能なチフス、パラチフス、マラリア、デング熱など伝染病も多く、天然痘に遭遇したことさえある有様だった。このような事態は度々医師会などの酒席での話題となつたもので、当方も「患者を 1 か所に集め、生活状態を良くして栄養改善をやらないと、特に老人の場合、結核をはじめ諸処の病気は治らない」と怪氣炎を上げたものだった。

そしてこの話題が意外な方向に急速に進展して医師会などの支援

もあって、養老院を開設する仕儀に立ち至ることとなった。現在の長野社会福祉事業財団、老人ホーム、長野敬老院の前身である。

旧長野町を巡る7つの谷に沿って散在する町村が合併して誕生した人口3万余の河内長野も、12万人もの田園都市に変貌した。長野社会福祉事業財団も旧来の養護および特別養護両老人ホームに併せて、ショートステイ、デイサービスおよび在宅老人介護支援各センターを新設。付属診療所、保育園を含め、長野社会福祉協力会の協力も得ながら大過なく経過するを得た。

戦後50年。終戦直後のあの地獄絵図は半世紀の歳月を経て、今や追憶のかなたのみの存在と化した許りではなく、今はこの世の極楽絵図が展開されつつあるかに思われる。

一方、驚異的なこの繁栄の陰でモダニズムの為せる業なのか、山は傷つき、野は荒れ、川は汚れ、四季折々の風物は全国数多の地ですでに見ることも聞くこともできなくなりつつある。大気も土も水も汚れた環境の中で、ヒトもまたそのカラダもココロも病んでいる。戦後の復興に少なからず寄与したはずの当時の若者も今は年老いて、祝福されて良い筈の長命とその孤独を嘆き、ボケとガンの恐怖に怯える。

保健・医療・福祉の三位一体が叫ばれ、第2次ゴールドプランが示されて久しい。今、年老いた人々は切実にその成果の挙がる日の訪れを待ち焦がれている。願わくば、官公民相携えて戦後復興のあの奇蹟を今一度、超高齢化社会の上に！ 少なくとも終戦直後のあの生き地獄が再びこの超高齢化社会に訪れるることのないことを、そしてそれが確実に杞憂であることを祈らずにはおれない。

### ※注釈

故・指宿孝博医師が平成7年9月に出版された河内長野市医師会創立40周年記念誌に投稿されたものから抜粋したものであり、文脈をつなげるため最少限度の加筆を致しました。



指宿孝博・興子夫妻



ご夫妻で旅行



指宿孝博医師



長野福祉協力会

## 故・指宿孝博医師と財団60年の歩み

社会福祉法人長野社会福祉事業財団の創業者である故・指宿孝博医師は大正7年、大阪府南河内郡長野町の指宿医院の長男として生まれた。お坊ちゃん育ちながら、友達を次々と自宅に呼んで遊んでいた。小学校からの同級生で最期まで親友として親交の深かった和田金太郎さん（協力会・元会長）は「指宿の家に行ったら珍しいハイカラなおやつが出るからみんな遊びに行った。しかし当時は家庭の格差があった時代なのに彼は誰にでも優しかった」と子供の頃を懐かしむ。また指宿少年は友達だけでなく、医院に受診に来たお年寄りにもとにかく親切でいたわったという。

そんな指宿少年が小学校の最後の綴方で「一人前になつたら親と同じ医学の道に進み、養老院を作つてお年寄りが楽しく過ごせるようにする」と書き記したのには同級生も驚いた。養護施設の設立はこの頃すでに指宿少年の心の中に芽生えていたのだ。

成績優秀な指宿少年はその後三国中学（現大阪府立三国ヶ丘高校）から大阪医專（現大阪大学医学部）に進み医師の道に進む。昭和13年、晴れて医師となった指宿医師は軍医として出兵した。戦場で負傷した兵隊達の治療を続け、昭和22年に日本に復員。指宿医師は古里に戻るなり同級生の安否を訪ね回った。生還した同級生との再会を喜び、昔のように自宅で仲間と祝った。

間もなく医院で診察を再開。しかし市井の人々は戦争で何もかも失い、病を診て貰おうにも診療代を払うお金がないという状況だった。指宿医師は「お金はいつでもいいですよ」と言って請求しなかつたという。そんな中で指宿医師は街中で焼け出され、脂垢にまみれて苦しむお年寄りや婦女子を目の当たりに見て衝撃を受けた。「戦争で犠牲になった弱いお年寄りや婦女子が安心して暮らせるようにしないといけない」。この頃から友人や医師仲間に養護施設を作るべきだと訴えていた。そして昭和25年、同級生の和田さんは指宿

医師から「養老施設を作るので知恵と力を貸して欲しい」と相談を受けた。和田さん達はいよいよやるのかと思い協力を快諾した。同じ頃、復員して来た従兄弟の指宿梓元院長・元理事長にも声をかけ、事務・経営面の仕事を任せた。本格的に長野敬老院の開設に向けての準備がスタートした。指宿梓元院長も発起人となり設立に奔走した。資金は指宿医師の個人資産に加え、敬老院開設に向けての講演会や懇母子講で集められ、養老事業が開始された。

こうして昭和 26 年 4 月には、南河内郡長野町向野に建設された生活保護法による定員 50 名の保護施設大阪敬老院として認可された。

昭和 27 年 5 月には組織を財団法人から社会福祉法人に変更。利潤の追求よりも社会福祉に専念する意志を固め、環境良好な古野に移転する。翌 28 年 6 月には生活保護法による保護施設（養老）として認可される。昭和 30 年には後援会や共同募金などの賛助により木造棟 1 棟が、翌 31 年にブロック棟 1 棟が増築され収容定員も 125 人に増加した。またこの年には長野保育園が古野にて事業を開始した。昭和 35 年に法人名をそれまでの社会福祉法人大阪敬老会から現在の社会福祉法人長野社会福祉事業財団として変更。新たなスタートを切った。

一方、施設が拡大するにつれ施設内の運営も大変になった。昭和 35 年から指導員として勤務していた曾和健さんは「当初は部屋も狭かった。食べる事と寝る事だけが補助されていた。それが昭和 38 年に老人福祉法の施行で変わった。当財団は大阪府下では他に先駆けて認可され、行政からの補助も増えてホーム内の生活に薄明かりが見えてきました。そして建物も近代化して年々良くなつた」と言うように、昭和 39 年に耐震耐火構造の鉄筋コンクリートの新館も完成し近代化を進めた。

昭和 56 年に敬老院は河内長野市立加賀田老人ホームと合併して現在の上田町への移転と同時に定員 50 名で特別養護老人ホームを新設し、財団創業 30 周年記念行事も行われた。一方この頃には施

設で働く職員もどんどん増えて多忙になっていく。これを支えたのは、当時は寮母と呼ばれた介護職員達だ。施設が移転した 56 年から働いていた辻道子さんは「当時は何でもやりましたし忙しかったですね。そんな時に指宿先生が『お年寄りの事を気遣ってくれるのにはありがたいが、第一に自分の体を気遣って欲しい』と言って下さったのです。本当に先生はお優しい方でした」と語っている。また下野富久美さんは「当時は特養の創世期で曾和指導員の元で勉強の毎日でした。介護にマニュアルはないとつくづく思いました」と懐かしむ。昭和 59 年から勤務した辰巳道代さんは「それまでは家族的な関係が介護保険後は何かと拘束があり変わりました。でも私は福祉の精神をここで学ばせてもらいました」。在宅マネージャーだった木下昌美さんは「介護保険制度もなく、措置と呼ばれた時代でしたが、おおらかな時代で楽しかったですね。今の私にとって敬老院での経験があらゆる場面で役立っています」と懐かしそうに語った。

平成 7 年に永島龍弘・現理事長が就任。前年の平成 6 年には新館も完成して、デイサービスセンター事業、介護支援センター事業、老人居宅介護事業など業務は拡大していくまさに成長期だった。当時院長だった水口知治さんは「新館ができたけど、まだ地域との関わりが足らなかったので、指宿先生がカラオケの機械を買って地域の人を招いて理解を深めましたね。敬老院が孤立してはいけない。地域の人とのふれあいが大切です」と述べた。

平成 12 年 4 月には介護保険法が施行されたが、補助金制度に支えられてきた事業からの決別のためには、施設の運営方法の改善、組織、人事改革の試練を経る必要があった。

平成 2 年から事務局長として勤めていた奥井喜代巳さんは、財産関係を調査し、不動産登記の整備をする傍ら、施設内ルール作りに着手していた。また理事の池辺政祐氏も平成 11 年頃から副院長を兼務し、施設に常駐して従業員ひとりひとりから意思確認しながら、そうした課題を解決していくことに成功した。これで介護保険法による特別養護老人ホーム事業、通所介護事業、訪問介護事業などを円滑に開始することができ、平成 13 年にはデイホーム大師町

も開所した。尚、奥井さんは事務長退任後も長野社会福祉協力会の中核メンバーとして地域の人々と協力して施設運営を支えてきた。敬老会や桜まつりなどのイベントがある度に協力会が駆けつけてくれた。

財団が成長し続ける中、平成13年に指宿孝博医師が永眠された。私財を投じ、常に慈悲の心で高齢者と働く親を支援してきた、まさに奉仕に尽くしたその一生を誰もが惜しんだ。指宿医師の長女の山田馨さんは、そんな父親を「父は自分の両親や母の身内に十分な孝行ができなかったと言い、年配の方に少しでも役に立ちたいという思いで私財を投げ打って敬老院を設立したようです。父は「医は仁術なり」という言葉通り生きた人でありました」と語る。

指宿医師の死後、地元の人達で組織された理事会を中心に財団は発展を続けている。すでに世代も代わりつつある。指宿医師の同級生で創業時に理事だった吉年晃氏の子息の吉年慶一・現理事は、今後の財団運営について「指宿先生の遺志を守り通して行くために組織や事業をきちんとしないといけない。時代の流れに対応していくために常に改革改善をしていく必要がある」と語っている。また山本明彦理事は今後の課題を「今後は競合施設も増え、競争が激しくなってくるでしょう。真の意味での地域密着が必要だ」と考えている。

平成18年に介護保険法が改正された。介護保険法が変わる度に財団は新しい試みをいち早く取り入れてきた。創業60周年を迎える平成22年4月には、新しい地域密着型小規模ユニット方式の介護施設「クローバーの丘」が開所した。当時顧問を務めていた松岡輝也さんは「現行制度では新施設にあまり補助がせず、ベッド数も少ないため収入面の苦労は続くだろうが、職員達の『入所者の笑顔が生き甲斐』という崇高な精神が長続きすることを願ってやみません」と新施設にエールを送っている。

60年の時を経て、ふれあいの丘、クローバーの丘、長野保育園に関わるすべてのスタッフは、戦後の荒れ野で指宿医師が堅く誓った熱い遺志を改めて心に刻み、未来に向けてこれからも地域の福祉活動に貢献し続けていくこととなる。